『東廓鄒先生遺稿』の諸本について

永冨青地

始めに

二〇〇七年に、「陽明後學文獻叢書」の一つとして鳳凰出版社より刊行された董平編『鄒守益集』は、その後、鄒守益の研究者の間において共通の底本として定着した感がある。

もちろん、同書が鄒守益の著作を完全に網羅しているとは言えず、文獻學的に見ても、後述のごとく若干の問題なしとはしない。しかしながら、そのような遺漏は誰が編纂を行なったとしても避けられないものであり、今後は、それらの遺漏の補塡・修正が、鄒守益を研究するものにとって、大きな責務となると考えられるのである。

本稿においては、そのような『鄒守益集』の缺を補う作業の一環として、日本尊經閣文庫、臺灣國家圖書館および上海圖書館に所藏されている『東廓鄒先生遺稿』について述べることとしたい。

一

「陽明後學文獻叢書」所收の『鄒守益集』は、隆慶六年（一五七二）に刊行され、清初に重刻された十二卷本『東廓鄒先生文集』および光緒三十年（一九〇四）に刊行され、民國十五年（一九二六）に重刻された、上海圖書館所藏の十三卷本『東廓鄒先生遺稿』を底本としている。このうち、前者の素性は明らかであり、特に問題はないと考えられる。[1] しかしながら、後者の十三卷本『東廓鄒先生遺稿』に關しては、それが鄒守

益沒後、實に三百六十年以上も經過していることから、その信憑性について、一考の必要があるだろう。

そもそも『鄒守益集』においては、なぜ上海圖書館藏本を底本としたのだろうか。この點について、『鄒守益集』冒頭の董平「編校說明」においては、江西省圖書館所藏の『東廓鄒先生遺稿』が殘缺本であるため、上海圖書館藏本を利用したとしている。[2] しかしながら、上海圖書館藏本は、同書卷末に添付された鄒仁任の識語に、「先文莊公手澤正集外、復有遺稿、未刊。後房祖善公於前明萬曆間爲山東布政使、編輯爲十三卷付梓。鼎革後遺失無存。故寒族諸前輩未之見」とあるように、元來、鄒守益の長子鄒善が萬曆年間に編輯した『東廓鄒先生遺稿』が、明清變革期に散逸したため、子孫である鄒仁任がそれをあらためて收集、編纂したものであり、元來の萬曆刊本に比べて信憑性の面で劣ると言わざるを得ないだろう。[3]

それでは、元來の萬曆刊本『東廓鄒先生遺稿』は現存していないのだろうか。實は、それは日本尊經閣文庫に存在していたのである。

同書に關しては、『尊經閣文庫漢籍分類目錄』（一九三四）四六七頁に以下のように著錄されている。

東廓鄒先生遺稿　十三卷　明鄒守益　明萬曆版　八册

しかしながら實際は、尊經閣文庫に所藏されている『東廓鄒先生遺稿』は卷一から三および卷十二、卷十三の計五卷のみであり、卷四から卷十二の計九卷は、版式を同じくする『東廓鄒先生文集』が配され、缺を補っている。[4] 本書は版框縱二〇・二糎、横十四・二糎、半葉十行、行二十字。花口單魚尾、四周單邊。卷三、三十三丁、四十七丁の版心に「書戶鄭賢良」、卷三、八十七丁に「鄭賢良」と記されている。また、目錄及び序跋は無い。各卷首首行頂格に「東廓鄒先生遺稿卷之一（～三、十二、十三）」と題し、各卷卷末には「東廓遺稿一（～三、十二）卷終」と題する。[5]

各卷卷首の書名の次の行には「門人周怡校正　不肖男善編輯」、その次の行には「門人宋儀望校增　後學邵廉校梓」と署されている。卷尾には牌記があり、「萬曆癸酉歲孟春之吉／奉按察司按察使發刊」とあることから、萬曆癸酉（元年、一五七三）に山東布政使であった鄒善によって刊行されたことになり、前記上海圖書館藏本に添付された鄒仁任の識語の記錄を裏付けるものといえるだろう。なお、鄒善は號穎泉、江西

省安福縣の人。嘉靖三十五年（一五五六）の進士。萬曆年間に太常卿を授けられ、致仕している。『明儒學案』巻十六（江右王門學案一）、『明史』巻二百八十三に傳がある。

また、その他の本書の刊刻に關係した人物としては、周怡は字順之、號訥溪、宣州太平縣（今の安徽省黄山市）の人。嘉靖十七年（一五三八）の進士。官は太常少卿に至る。隆慶三年（一五六九）歿。『明儒學案』巻二十五（南中王門學案一）に傳あり。宋儀望は、字望之、號鳴山、晩號華陽。江西省吉安府永豐縣（今の江西省永豐縣）の人。嘉靖二十六年（一五四七）の進士。萬曆年間に官大理卿に到る。張居正に忤い引退。年六十五にして卒す。聶豹に師事する。『陽明先生文粹』・『河東重刻陽明先生文錄』の編者。著に『華陽館文集』十七巻續集二巻がある。『明史』巻二百二十七、『明儒學案』巻二十四（江右王門學案）に傳がある。[6] 邵廉は字虛道、號圭齋、江西省南豐縣（今の江西省南豐縣）の人。嘉靖四十四年（一五六五）の進士。官職は福建省建寧縣（今の福建省三明市建寧縣）の知縣から知成都に至る。萬曆十一年（一五八三）免職。『河東重刻陽明先生文錄』に序文を記している。著に『圭齋集』がある。

以上、本書の刊刻に攜わった人々の略歷を見てきたが、周怡を除くすべての人物が江西省出身であるのは注目に値する。これらの人々は、地緣および人緣の二重のネットワークによって、鄒守益・鄒善らの鄒氏一族と結びついていたといえるだろう。また、宋儀望・邵廉において見られたように、本書以外にも王學關係の出版に關係しているものが多いのも偶然ではあるまい。彼らは出版による王學の宣傳、そしてそれに伴う王學の勢力擴大を明らかに意圖していたのである。

次に、尊經閣文庫藏本の內容を見ていきたい。

卷之一　說類
卷之二　序類
卷之三　序類
卷之十二　銘類
卷之十三　銘類

現存するこれらの各巻についてみる限り、尊經閣文庫藏本

と上海圖書館藏本とに收錄されている文章は、同じものである。但し、民國十五年（一九二六）に重刻された上海圖書館藏本は、萬曆元年（一五七三）における尊經閣文庫藏本の刊刻後、實に三百五十三年後に刊行されたものであるため、詳細に見ると、字の誤りが見られる。以下、それを指摘していきたい。なお、讀者の便宜のため、上海圖書館藏本については『鄒守益集』の該當部分を利用し、頁數もそれに據っている。

上海圖書館藏本（頁數は『鄒守益集』による）　尊經閣文庫藏本

卷之一

「前峰閒隱說」

今之所閒、古之所閒（四七四頁三行目）　今之所閒、古之所閒

古之閒也（同上）　古之閒也

卷之二

「贈撫臺東沙張公司寇南都序」

事權重（一七四頁終わりから三行目）　事權重

「興國縣志序」

違道以千譽（一七九頁終わりから四行目）　違道以干譽

「慶郡大夫新岑陶公考績序」

仰止窺見聖門相傳學脉（一八二頁二行目）　仰上窺見聖門相傳學脉

「絜矩篇贈紀山曹柱史」

下之使上（一九九頁最終行）　下之事上

「旌節詩集序」

或奮然一且（二一〇頁十行目）　或奮於一旦

卷之三

「慶司馬淨峯公平徭序」

一體之愛、惻怛周貫（二四三頁終わりから四行目）　一體之學矣。一體之愛、惻怛周貫

「吉水白沙陳氏族譜序」

貴富每傲（二七〇頁五行目）　貴富無傲

「罔極錄序」

然後有殉於鬬狼者矣（三〇七頁三行目）　然後有殉于鬬狠者矣

「義城黃氏重修譜序」

吾季之亂（三一二頁終わりから二行目）　五季之亂

卷之十三

「明故黃岡萬松君及李孺人合葬墓誌銘」

因商榷於堅學之要（一〇六二頁四行目）　因商確于聖學之要

「潘孺人墓志銘」　車鞏

車鞏（一〇七四頁五行目）

「明故石首顧齋王大夫墓表」　亳州

亳州（一一一〇頁六行目）

以上の多くの場合において、上海圖書館藏本と比して尊經閣文庫藏本の方がより正しいものとなっているのは明らかであろう。勿論、『鄒守益集』においても、これらの多くには校語が付され、誤字の可能性が指摘されてはいる。しかしながら、あくまで推測に止まる『鄒守益集』と、明版による實證との間には、やはり違いがあるといわざるを得ないのであり、今後、『鄒守益集』を利用する際には、尊經閣文庫藏本との比較が必要とされるだろう。

二

以上において見てきたように、元來の萬曆刊本『東廓鄒先生遺稿』は、日本尊經閣文庫に存在しているが、同書は卷一、二、三、十二、十三の計五卷が現存するに過ぎない。

內閣文庫藏本以外の明版の『東廓鄒先生遺稿』としては、臺灣國家圖書館所藏本を擧げることが出來る。

同書に關しては、『國立中央圖書館善本書目增訂二版』（國立中央圖書館特藏組編輯、一九八六）一〇四六頁に以下のように著錄されている。

東廓鄒先生文集十二卷遺稿存八卷十六册　明鄒守益撰　明嘉靖末年刊本　遺稿存卷一至卷八

ここで『東廓鄒先生遺稿』を十二卷本『東廓鄒先生文集』の合刊本のように記しているのは明らかな誤りであり、本書は單行された『東廓鄒先生遺稿』なのである。本書は半葉十行、行二十一字。花口單魚尾、四周單邊。一丁を除きすべての丁の版心に刻工名が記されている。確認できた刻工名は以下の通り。「劉思智」、「袁孟朝」、「劉三介」、「程儒」、「王秀」、「趙志信」、「郭偉」、「劉本元」、「杜金」、「祝崇信」、「劉成」、「孫志强」、「成仲登」、「程儀」、「程彥令」、「程信」、「李思義」、「郭乾」、「文照」、「郭」、「孫强」。「東廓鄒先生遺稿目錄」あり。序跋は無い。各卷首首行頂格に「東廓鄒先生遺稿卷之一（～八）」と題し、各卷卷末においても、「東廓鄒先生遺稿卷之一（～三、五、六）」と題するが、卷四、七は卷末には「卷四（七）」、

巻八は「卷之八」とのみ記す。各巻巻首の書名の次の行には「門人宛陵周怡校　不肖男善輯」と署されている。

本書と、萬曆元年（一五七三）に刊刻された尊經閣文庫藏本とを比較してみると、尊經閣文庫藏本は前述の如く、周怡の校正、鄒善の編輯の後に、宋儀望の校增、邵廉の校梓を謳っており、臺灣國立圖書館藏本を宋儀望、邵廉が增訂、刊行したものと考えられるのである。從って、臺灣國立圖書館藏本には刊行年を示すものはないが、尊經閣文庫藏本が刊行された萬曆元年（一五七三）より以前、隆慶年間（元年～六年、一五六七～一五七二）または嘉靖末年のことと推定されるのである。

なお、『中國古籍善本總目（集部、上）』（線裝書局、二〇〇五）一四〇六頁には、「東廓鄒先生遺稿十一卷　明鄒守益撰　明刻本　十行二十一字　白口四周單邊　甘肅省圖書館・重慶市圖書館」として『東廓鄒先生遺稿』が著錄されている。書式が臺灣國立圖書館藏本とほぼ一致することから考えて、あるいは臺灣國立圖書館藏本と同系統の版本であるかもしれない。(7) 後日機會を得て調査したい。

次に、臺灣國立圖書館藏本の內容を見ていきたい。

「東廓鄒先生遺稿目錄」

卷之一
　說類（全二十編）
卷之二
　序類（全三十四編）
卷之三
　序類（全三十五編）
卷之四
　記類（全二十七編）
卷之五
　簡類（全五十編）
卷之六
　簡類（全五十九編）
卷之七
　簡類（全二十二編）
卷之八
　答問類（全十六編）

以上の臺灣國立圖書館藏本所收の文章は、すべて上海圖書館藏本にも收錄されており、從って、それを底本とする『鄒

守益集』にも收錄されている。また、上海圖書館藏本においても、臺灣國立圖書館藏本所收の文章は、ほとんどの場合、そのままの順序で配列されており、上海圖書館藏本の底本である萬曆年間刊刻の『東廓鄒先生遺稿』が、臺灣國立圖書館藏本の增補版であることを如實に物語っているといえるだろう。

以上述べたことからも明らかなように、臺灣國立圖書館藏本には尊經閣文庫藏本同樣、佚文といったものは見られないが、本書によっても、上海圖書館藏本および『鄒守益集』の誤字が判明する。以下、それらを指摘していきたい。[8] なお、讀者の便宜のため、上海圖書館藏本については『鄒守益集』の該當部分を利用し、頁數もそれに據っている。

上海圖書館藏本	臺灣國立圖書館藏本
（頁數は『鄒守益集』による）	
卷之四	
「曾氏義田祭田記」	
天乎義田（三八五頁三行目）	天平義田
「濂洛遺儒祠記」	
兩廊各干楹（四〇八頁十行目）	兩廊各若干楹
「烏土溪水利記」	
致和格物之傳（四一三頁一行目）	致知格物之傳
卷之五	
「簡吳學愚」	
果服關（六三三頁三行目）	果服閡
卷之六	
「簡凌大尹」（六三八頁終わりから四行目）	「簡凌海樓大尹」
「簡刑道長」（六四〇頁六行目）	「簡邢道長」
「答周道亨」	
蓋二世之言（六四六頁三行目）	蓋二氏之言
「答鄭景明」	
特來而順應（六四七頁終わりから二行目）	物來而順應
「簡何龍泉」	
所以求不逾知也（六四九頁三行目）	所以求不逾矩也
「答仰子靜」	
終不免喻矩（六五〇頁終わりから二行目）	終不免踰矩
「寄伯子義」五	

猛如刷洗（六五八頁五行目）　猛加洗刷

卷之七

「再復十二條」

藏否不同（六九四頁四行目）　臧否不同

卷之八

「會昌胡愼夫請書」

入做處（七八〇頁終わりから五行目）　入微處

三

以上、『遺稿』の明版についてみてきたが、最後に『鄒守益集』が底本としている上海圖書館藏本について述べてみたい。

前記の『鄒守益集』冒頭の「編校說明」には、上海圖書館には民國刊の『遺稿』のみが所藏されているかのように記述されているが、實際には同館には清末刻本二部、民國重刻本一部が所藏されている。

これらの諸本はいずれも清末以降に刊行されたものであるため、同館編の『上海圖書館善本書目』（一九五七）には掲載されておらず、同館の電子檢索に記載があるのみである。そのため、まず、その電子檢索の記述に據って、これらの諸書についてみていきたい。

上海圖書館電子檢索

東廓鄒先生遺稿

出版　鄒仁任、清光緒三十年（一九〇四）

版本類型　重刻本

分類　集　別集　明

索書號　線普長三一一八二一—二八、線普長四三六九二四—三五（十二冊）

東廓鄒先生遺稿

出版　清光緒三十年（一九〇四）刻、民國十五年（一九二六）重印

版本類型　刻本

分類　集　別集　明

索書號　線普長三八四一九四—九九

ここにおける記述からもわかるように、同館には民國刻本

に先立つ清末刻本二部が所藏されている。

以下、まずこれらの清末刻本についてみていきたい。

○「線普長四三六九二四―三五」本（以下、「A本」）

十二册、夾板有り。各册に題簽「東廓鄒先生遺稿」有り（一部脱落）。封面に「東廓鄒先生遺稿」（封面は「三八四一九四―九九」本と一致するが、本書の方が印刷が鮮明）。序跋類は無し。「東廓鄒先生遺稿目錄」有り。目錄末尾に以下の題記有り（【　】内は朱印）。

【明】門人周怡校正・不肖男善編輯
【明】門人宋儀望校增・後學邵廉校梓
嗣孫國光・信承・煜南・□鼎・大可・信棻校
光緒三十年甲辰仲冬月　穀旦【嗣孫仁任續刊】

各巻巻首に「東廓鄒先生遺稿巻之一（～十三）、巻末に「東廓鄒先生遺稿巻之一（～十三）終」の記載あり。

東廓鄒先生遺稿巻之一の二行目、「說類」の下に「嗣孫仁任、仝男信鵬、煜南、信棻、孫義鈞・義質、義鏞續刊」の記載あり。

裏表紙裏に朱紙が添付されており、そこに以下の文が印刷されている。(9)

先文莊公手澤正集外、復有遺稿、未刊。後房祖善公於前明萬曆間爲山東布政使、編輯爲十三卷付梓。鼎革後遺失無存。故寒族諸前輩皆未之見、以爲祇有正集耳。忽於近年得諸山東街市、想必善公爲布政時所流傳者也。於是勉力竭貲、重付手民。今已告竣、爰述其崖略、以誌(10)先文莊公之手澤未湮、亦爲子孫者之一快云。

鄒仁任謹識。(11)

本識語は先にその一部を引用したが、『遺稿』の刊行の經緯を述べたものとして極めて重要なものである。それにしても、鄒守益の子孫たる鄒仁任でさえも、山東省で偶然見つけるまで明版の『遺稿』を入手できなかったことは、當時において、『遺稿』の明版が非常な稀覯書となっていたことを如實に示すものとして注目に値するであろう。

なお、本書は版框縦十八糎、横十一・七糎、半葉十行、行二十二字。四周單邊、花口、單魚尾。魚尾上に「東廓鄒先生遺稿」の記載あり。刻工名の記載なし。印は「上海圖書館」藏印のみ。

○「線普長三一一八二一―二八」本（以下、「B本」）

八冊、帙、夾板等は無し。題簽、封面および「A本」に添付されていた朱紙はない。序跋類は無し。「東廓鄒先生遺稿目錄」有り。目錄末尾の題記は「A本」と同一だが、朱印は「A本」ほど鮮明ではない。

本書は版框縦高さ十八糎、横十一・七糎、半葉十行、行二十二字。四周單邊、花口、單魚尾。魚尾上に「東廓鄒先生遺稿」の記載あり。刻工名の記載なし。印は「上海圖書館」藏印のみ。

以上の二部はともに清光緒三十年（一九〇四）刻本と認められるが、おそらく「A本」の十二冊が原裝であり、「B本」はそれを八冊に改裝したものであろう。また、「A本」・「B本」の目錄末の朱印および「A本」裏表紙裏の朱紙によれば、本書の刊行者は鄒仁任ということになるが、朱印および朱紙は刊行後に捺印、添付された可能性があり、實際の刊行は卷一卷末にあるように鄒氏一族の共同作業として行われた可能性が高いであろう。

次に、『鄒守益集』が底本とした、民國重版本について述べてみたい。

○「線普長三八四一九四―九九」本（以下「C本」）

六冊、帙、夾板等は無し。題簽、封面はあるが、「A本」に添付されていた朱紙はない。題簽の文字は明らかに「A本」とは異なる（封面は「A本」と同一のものだが、「A本」ほど鮮明ではない）。「重印鄒東廓先生遺稿序」（民國十五年胡慶道）および「重録十四世祖文莊公東廓遺稾原序」（光緒三十年鄒鼎序）の二序有り。[12]「東廓鄒先生遺稿目錄」有り。目錄末尾の題記は「A本」と同一だが、【　】内の朱印は押されていない。

本書は版框縦十八糎、横十一・七糎、半葉十行、行二十二字。四周單邊、花口、單魚尾。魚尾上に「東廓鄒先生遺稿」の記載あり。刻工名の記載なし。印は「上海圖書館」藏印のみ。

以上の考察からも明らかなように、上海圖書館所藏の『遺

稿』三點のうち、刊行年は清末刊行の「A本」および「B本」が早く、そのうちでは「A本」が原形を保っていると考えられる。従って、本來、上海圖書館所藏本を底本とするならば「A本」に據るべきであるが、筆者が調査した限りにおいては、本文の字句においては三本の間に相違は見られないため、「C本」を底本とする『鄒守益集』に據っても、清末刊本の內容を窺うことは可能であろう。

終わりに

以上において見てきたように、尊經閣文庫藏本、臺灣國立圖書館藏本および上海圖書館藏本の『東廓鄒先生遺稿』を見ることにより、隆慶年間（または嘉靖末年）から民國十五年に至る『遺稿』の刊行と流布の歷史を知ることができる。前述のごとく、『遺稿』はこの間、萬曆刊本から考えても三百五十年以上にわたる生命力を持ちえたのである。このような『遺稿』の生命力は、鄒氏一族による、いわば家學として鄒守益の學問を保存しようとする强い意志によって支えられてきた。そしてこのような强靭な生命力は、思想的には遙かに華々しい存在である、王畿や王艮の著作においてすらも見られないものなのである。地緣、血緣によって支えられた、鄒守益を中心とする江西儒學については、近年呂妙芬等によって再評價が行われつつあるが、彼らの活動については、出版の面からも着目していく必要があるのではないだろうか。[13] 本稿は、書籍という目に見えるものに着目することによって、鄒守益、さらには王門諸子の活動を見直していくことの端緒となることを意圖したものであり、博雅の叱正を賜ることができるならば望外の幸せである。

注

（1）　但し、『鄒守益集』が底本とした「四庫全書存目叢書」集部六十五・六十六册（莊嚴文化事業有限公司、一九九七）所收の『東廓鄒先生文集』は、北京大學圖書館所藏の後印本であり、摩滅が著しいため、『鄒守益集』においては多くの誤讀、缺落が生じることとなった。この點に關しては、筆者は專論を準備中である。

（2）　なお、江西省圖書館藏本は、『江西省圖書館古籍善本書目』（江西省圖書館圖書保管部編、一九八二）をはじめとする各種善本目錄に一切收錄されていないことから、上海圖書館藏本同樣、普通線裝本に分類される、清末または民國刊本であると思われる。

（3）　鄒仁任の識語の全文は後掲。

（4）　巻十二に關しては、『東廓鄒先生遺稿』と『東廓鄒先生文集』の雙方が配されている。なお、この『東廓鄒先生文集』は十二巻本であり、その完本は内閣文庫に所藏されている。内閣文庫藏本に關しては、拙稿「内閣文庫藏『東廓鄒先生文集』について」（『汲古』第五十八號所收、二〇一〇）を參照されたい。また、このように別種の版本を配しながら、それが今日まで判明しなかったのは、これら二部の著作の書式が酷似していることによるところが大きいが、その理由としては、これら二部がほぼ同時期に、いわばセットとして刊行されたことによるものであると考えられるのである。

（5）　巻十三のみ、「東廓鄒先生遺稿卷十三」とする。

（6）　なお、宋儀望は本書のほかにも、『鄒東廓先生文選』の校正および序文執筆を擔當している。同書に關しては拙稿『天津圖書館所藏『鄒東廓先生文選』について』（『東アジアの陽明學　接觸・流通・變容』、東方書店、二〇一一）を參照。

（7）　その場合、臺灣國立圖書館藏本は、全十一巻のうち、八巻までの殘缺本ということになる。但し、臺灣國立圖書館藏本巻首の「東廓鄒先生遺稿目錄」には巻八までしか記されておらず、この點に關しては後考を待ちたい。

（8）　尊經閣文庫藏本と共通するものは省略した。

（9）　『鄒守益集』では「東廓鄒先生遺稿跋」として同書一三四三～一三四四頁においてこの文を收錄しているが、「載民國十五年重印『東廓鄒先生遺稿』巻末」（同書一三四四頁）としているのは、「載清末（または光緒三十年）刊『東廓鄒先生遺稿』巻末」の誤りであるし、さらに言えば、この文が添付されたものであることを明示していないのは問題である。

（10）　『鄒守益集』が「誌」を「志」に作るのは誤りである。

（11）　『鄒守益集』はこの五字が缺落している。

（12）　これら二序は『鄒守益集』に收錄されているが、『鄒守益集』が「重鋟十四世祖文莊公東廓遺稾原序」を「重鋟十四世祖文莊公東廓遺稿序」として「原」の字を脱するのは誤りである（同書一三四二頁）。また、同書が「重印鄒東廓先生遺稿序」の「非先生之教根本節目粹然至大」を「非先生之教根本節目粹然至大」（同書一三四五頁）とするのも同様に誤りである。

（13）　呂妙芬『陽明學士人社群』（中央研究院近代史研究所、二〇〇三。簡體字版は新星出版社、二〇〇六）三章「吉安府的講會活動」を參照のこと。なお、筆者による鄒守益の著作に關する既發表の論文としては、上記二點の他に、「臺灣國家圖書館藏九巻本『東郭先生文集』について―現存最古の鄒守益の文集―」（『人文社會科學研究』第五十號、二〇一〇）がある。併せて參照されたい。

〈キーワード〉鄒守益、東廓鄒先生遺稿、陽明後學